

公益社団法人日本マレーシア協会

2020年(令和2年)度事業報告



マレーシア半島クダ州でマングローブ植林を実施(2020年12月)



ボルネオ島サラワク州サバル森林センターで植林用苗木の育苗を実施(2021年3月)

2021年4月

2020年度は、新型コロナウイルスによる外出制限等の影響を受け、国内並びにマレーシアにおける友好親善活動を、当初の事業計画通りに進めることが出来ませんでした。このような状況下においても、会員各位並びに関係者のご協力により、公益活動の推進に努めて参りました。

当年度の国内並びにマレーシアにおける主な活動実績をご報告致します。

国内における活動

●駐日マレーシア大使館へマスクを寄贈

昨年4月24日(金)午後、本協会より駐日マレーシア大使館へ三層不織布マスク700枚を寄贈しました。小川理事長と森林理事が大使館を訪問し、ダト・ケネディ大使へお渡ししました。大使館にて新型コロナウイルス予防に関わる政府備蓄品としてお預かり頂きました。



●機関誌・資料発行配布、マレーシアの書籍の翻訳出版協力

1. 会報「マレーシア」の発行・配布

Vol.36～Vol.40を発行・配布しました。

2. マレーシアの書籍の翻訳出版協力

マレーシア学術出版会、マレーシア翻訳書籍研究所、本協会との翻訳出版協力活動の一環として紀伊國屋書店のご協力を得て、当年度は2冊の邦訳書籍の出版及び国内での紹介への協力を行いました。



『マハティール語録 若者よ元気かい？』
チェデット・マット・ロディ編著

20代後半の青年実業家である編著者が、マハティールの言葉に打たれ、過去の書籍や資料を読み込み、国家、民族、宗教、教育など10の分野に分類し、単独インタビューを経てそれぞれに解説をつけた、マハティールという稀有な人物の哲学に触れるための格好の入門書です。本書は、会員各位並びに全国図書館等へ寄贈しました。



『ビューティフル・トレンガヌ マレーシア・トレンガヌ州の魅力』
ノライン・マンソール著

国立マレーシア・トレンガヌ大学が、地域の観光産業促進と海外市場の開拓への取り組みの一環として独自に出版した、トレンガヌ州を紹介する書籍の邦訳書です。マレーシア半島東海岸に位置するトレンガヌ州の魅力的な場所、独特な文化、おいしい食べ物など、トレンガヌ州の魅力について、カラー写真で紹介するガイドブックです。本書は、国内での紹介に協力しました。

当年度は、下記の書籍への出版協力も行い、下期にマレーシアで印刷・製本される予定でしたが、昨年後半から、マレーシアでは再び活動制限令が発令され、大学などの機関では一時業務を停止したため発行が遅れました。発行され次第、国内での紹介に協力します。



『ラザック先生 マレーシアと日本の架け橋』
カルソム・フセイン他著
マレーシア・イスラム科学大学・マレーシア書籍・文芸局他刊

戦時中、南方特別留学生として在留時に広島で被爆しながらも、戦後、マレーシアで青年教育と日本語教育に尽力した方の伝記です。



『組織改革 概念と実施テクニック』
ムサ・アリ著
マレーシア理科大学・マレーシア翻訳書籍研究所刊

マレーシア等の行政機関や企業等でテキストとして使用されている書籍の邦訳書です。



『日本の環境哲学 ある旅行者の備忘録』
ザイニ・ウジャン著
マレーシア翻訳書籍研究所刊

マレーシア技術大学副学長、高等教育省、エギルギー・グリーンテクノロジー・水資源省の事務次官等を歴任した著者が、マレーシア人として、日本社会の特徴について環境面を中心に分かりやすく紹介します。

3. マレーシア関連書籍の出版

本協会会報誌「マレーシア」で、2010年8月発行号よりご連載頂いている、上東輝夫名古屋商科大学名誉教授・元駐コタキナバル日本総領事 の原稿を書籍として編集・出版し、会員各位へ進呈したほか、全国主要図書館等へ寄贈しました。



上東輝夫元コタキナバル総領事と編集作業に参加した
日本大学のインターン生(2019年9月撮影)

● マレー語スピーチコンテストを開催



マレー語を学習する大学生を対象に、日頃の成果を発表する機会として、在京マレーシア政府機関等と協力し、「マレー語スピーチコンテスト」を開催しています。

昨年12月27日(日)、日本アセアンセンターホールにて、首都圏の大学生15名が参加して、新しい生活様式にて、スピーチコンテストを開催しました。マレーシア大使館のタンゲスワリ二等書記官、マレーシア貿易開発公社のニックマン所長、日本アセアンセンターのロズィヤナハユ事業統括長が審査員となり、上位3名を表彰しました。

● さくらオンライン交流



2020年度の国立研究開発法人科学技術振興機構「日本・アジア青少年サイエンス交流事業(さくらサイエンスプラン)」オンライン交流(フォローアップ支援)事業として、本年3月2日(火)と4日(木)にオンライン交流によるフォローアップ研修を実施しました。

本交流は、昨年1月にマレーシア国際イスラム大学の学生を対象に、九州北部を流れる筑後川流域で実施した「持続可能な河川流域構築に必要な科学技術を学ぶ SDGsの取り組みを核に」の振り返りを目的に実施しました。3月2日は福岡大学と、4日は福島大学とマレーシア国際イスラム大学との間、両国の大学紹介、テーマに関する日本側教員による講義、両国学生の発表とディスカッション、学生同士の交流などのプログラムを行いました。

関わって頂きました関係者の熱意と学生の積極的な参加により、バーチャル空間ではありましたが、充実した研修及び交流を実施することができました。

マレーシアにおける活動

本協会では、1995年より、企業、団体、個人からのご協力を得て、サラワク州において熱帯雨林再生のための植林活動を行っています。伐採によって劣化した二次林におけるフタバガキ在来種の植林を主とした低地熱帯雨林の植生回復と、2017年からはマングローブ植林による湿地林の保全も行っています。2018年からは、クダ州においてマングローブ林再生活動を開始し、ボルネオ島と半島部の両地域で熱帯雨林再生活動を展開しています。両地域の活動において、森林局や地域の国立大学、そして活動地域の村落や小中高校等と連携し、定期的に日本からボランティアが参加しながら、植林だけでなく、環境国際交流も実施しています。

今年度は、新型コロナウイルスの影響により、昨年3月18日に「活動制限令」が発令され、外出禁止となったため、活動を一時休止しました。5月12日に「条件付き活動制限令」へ移行し、社会活動の一部が緩和されたため植林準備を開始し、6月10日から「回復のための活動制限令」となり、植林活動を含む、ほぼ全ての社会活動が許可されたため、政府の許可のもと活動を再開し、活動を実施しました。

今年度の、サラワク州とクダ州における熱帯雨林再生活動の実施状況をご報告します。

●サラワク州における活動

「三菱商事(株) 熱帯雨林再生プロジェクト」

昨年5月中旬よりサバル国立公園でライン式植林と劣化の激しい草地での密植・混植式を組み合わせた植林を開始。6月からは、アペン国立公園の活動も再開し、村の女性が育苗した果樹の植林や、劣化の激しい草地において植生回復を早めるために密植・混植式の植林を行っています。

昨年5月から本年3月までに、サバル国立公園、アペン国立公園、バライ・リンギン保護林において約5万本の在来種の苗木を植林しました。また、次年度の植林用に約4万本の苗木のまきつけを行い、その後も継続しています。

今年度から始めた、密植式に植えた地域の中に調査区画を設定し、そこで植栽木の成長データを定期的に計測しています。マレーシア・サラワク大学の専門家による分析を行い、今後の植林に活用していきます。



「(株)木下グループ 青少年研修プログラム」

マレーシアでは活動制限令後、小中高校はしばらく休校となり、昨年7月から新たな生活様式で学校が再開し、その後、11月から再び休校し、本年3月半ばから再開しています。学校ではマスク着用となり、また、町に出る際などはマスク着用が義務となりましたが、収入の少ない村落地域で十分なマスクを入手するのは困難な状況に置かれています。そのような状況の中、「木下の森 青少年研修プログラム」の一環として、日本からマスクをサラワク州へ送付し、植林活動地域にある小中高校や村落へ1万8千枚のマスクを寄贈しました。村落地域ではマスクを子供たちのために十分確保する余裕がないので、大変ありがたいとの声が寄せられました。本協会では、今後も、引き続き定期的なマスク送付を行い、周辺地域の村落や学校へのマスク寄贈を続ける予定です。

また、「木下の森 青少年研修プログラム」として、アペン国立公園で1,600本の植林を行ったほか、学校における環境教育プログラムを実施するべく、政府機関や学校と日程の調整を行っています。



「サンパディ保護林での植林活動」

昨年8月、ルンドゥ地区のサンパディ保護林での活動も開始し、(株)ダンロップホームプロダクツご協力による「ダンロップホームプロダクツの森」と「ダイドードリンク・パートナーシップ・フォレスト」にご参加頂いている方々のため活動として、二次林の中にライン式でフタバガキ科在来種の苗木3千本の植林を行いました。作業に参加した村人にもマスクを配布しました。



「タカサゴの森 熱帯雨林再生プログラム」

高砂熱学工業株のご協力により、マレーシア・サラワク大学で実施している「タカサゴの森」熱帯雨林再生プログラムは、昨年3月の「活動制限令」以後、同大学内に学生や外部作業員の立ち入りができなくなったため、教員と大学スタッフによって活動を継続し、昨年12月までに5,000本の育苗と3,000本の植林とメンテナンス作業を行いました。

本年1月、500本の植林を行い、その後も作業を継続しています。今後も、大学の活動規則に従いながら、育苗と植林作業を進めて行く予定です。



「マングローブ林再生活動」

昨年6月まで「緑の募金国際緑化助成」の支援を受けて実施した、クチン郊外の海岸地域マングローブ林再生活動を継続しています。昨年12月18日、サラワク州森林局と共催で、地域住民参加による植樹行事を開催し、1,000本の植林を行いました。当日は、森林局長官も参加しました。



●クダ州における活動

「(株)木下グループ 木下の森 mangrove 林再生プロジェクト」

2019年度より、「木下の森 mangrove 林再生プロジェクト」をマレーシア半島部クダ州に位置するムルボック湿地保護林において、マレーシア理科大学(USM)「地域教育拠点センター」、学校、村落と協働で実施しています。

活動制限令による活動休止時期がありましたが、昨年6月から専門家の指導のもと、育苗と植林活動を再開し、村人による限られた人数での作業となっていますが、3月までに約6,000本の植林を行いその後も継続しています。

クダ州の活動地域村落でも、「木下の森 mangrove 林再生プロジェクト」の一環として、日本から2,500枚のマスクを送付し、現地専門家が活動地域の村落と小学校を訪問して、寄贈しました。



「普及啓発プログラムの実施」

マレーシア理科大学地域教育拠点センターが持つ、マレー半島北部の行政、教育機関、NGO等とのネットワークを活用し、ムルボック湿地保護林における mangrove 林再生活動を通じて、教育又は社会奉仕活動として、保全活動に参加する団体の確保に取り組む活動を、経団連自然保護基金の助成を得て実施しています。

昨年12月、教育プログラム用教材が完成し、同月21日には、地域のプログラム拠点校となったハジ・オマー・タヒール小学校にて、 mangrove 保全と環境教育プログラムに関する合意文書のオンライン署名式を行いました。

2018年11月に、活動地を含む一帯がマレーシア政府により「グヌン・ジュライ・ジオパーク」に認定されています。本活動は、ジオパーク内の住民参加型生物多様性保全プログラムとして、ユネスコ国際ジオパーク登録へ寄与することも目指します。



●サラワク州森林公社と協定書調印

本協会では2019年にサラワク州政府と「森林景観復元」プログラムの推進に関する協定書の調印を行いました。同協定の補完文書として昨年11月25日、本協会が植林を行う二カ所の国立公園を管轄する政府機関サラワク州森林公社との協定書調印式が行われました。当日は、同公社のズルキプリ長官、本協会の酒井コーディネーターらが出席し、協定書に書名をしました。調印式終了後、日本から送ったマスク千枚を同公社へ寄贈しました。

その後、本年2月20日に 同公社ズルキプリCEOほか幹部5名がアペン国立公園を訪問し、酒井コーディネーターの案内で地域住民参加型によるライン式と密植式の植林、果樹の植林による多様化森林造成、村人による育苗の状況を視察しました。ズルキプリCEOは「長年にわたる住民参加型植林活動によって、大きな成果が出ていることに感銘を受けた。必要なことは何でも協力していきたい」と述べました。



●オランウータン保護へ協力

本協会では2017年度より、サラワク州セメング野生生物保護区にあるオランウータン保護センターへ、オランウータンが暮らす森の保全と、オランウータンの保護活動への協力として、毎年千リングを寄付しています。本年1月15日、酒井コーディネーターが同センターを訪れ、寄付金を届けました。



●マレーシア国際イスラム大学へ日本語学習教材寄贈

本協会の働きかけによる日本政府支援によって、2019年12月に日本語教育関連機器等整備が行われた、マレーシア国際イスラム大学の日本語教育リソースセンター(ラザク・ルーム)の開所時に、本協会では、関係各位のご協力を得て図書約300冊、映像教材約100本、その他教育素材(かるたなど)を寄贈しました。同センターへの継続的な協力として、同大学の学生と教員の要望に応じて、世界各国で人気の漫画『鬼滅の刃』全巻セットを、紀伊國屋書店のご協力を得て、本年1月に同センターへ寄贈しました。

